日本アンダーライティング協会 第84回教育講習会

今井氏（日本生命）を中心に活発な議論

日本アンダーライティング協会は3月11日、第84回教育講習会「査定医の相談室」を開催した。講師に日本生命契約部契約査定グループ主任査定医長の今井理氏を迎え、パネラーとしてメットライフ生命の山岸正樹氏、エヌエヌ生命の吉益聖子氏が参加して、AI技術の進展や医療現場の最新動向、アンダーライティングの将来像などについて議論が行われた。

講習会の冒頭、今井氏は「AI技術と査定の未来」について詳述した。現在、AIは画像診断や問診の要約といった分野で大きな進歩を遂げており、医療現場において不可欠なツールとなっている。AI導入によって、診断精度が向上し、医療提供の効率化が図られている。しかし、生命保険の査定へのAI導入には、いくつかの障壁があるとも論じた。特に、日本と海外の保険業界における告知項目数や査定基準の違いは、日本におけるAIの適用を難しくしている。実際、日本の保険会社は諸外国と比較して告知項目が少なく、簡素化する傾向がある。それによりAIが扱う情報量が限られ、AIのメリットを享受することが困難になっているとのこと。この点について、今井氏は「日本では諸外国とは異なるAI活用法として、インタビュー形式で必要情報を過不足なく集め、要約すること、また外国語の告知を翻訳することも選択肢にある」と指摘した。また、査定の将来像について、医療情勢・健康診断の受診率・保険商品も大きく変わっていることを前提としつつ、「AI技術の進展によりアンダーライターの役割が一部機械に代替される可能性がある一方、複雑なケースや最新の医学知識の維持には人間の判断が不可欠である」と述べた。AIを扱う側としてAIの守備範囲・取扱い方法を意識し続けることが大切であるとした。

続いて、「査定基準の改定」についての議論が行われた。改定間隔については各社判断と考えられるが、今井氏は診断基準の変更や医療技術の進展に応じ、査定基準を定期的に見直す必要があることを強調した。特に、国際疾病分類（ICD）の変更が査定基準に与える影響について慎重な対応が求められると述べた。昨今話題となっているICD－O「下垂体腺腫・胸腺腫」の性状コード変更についても触れた。今井氏は、「ICDの疾患分類変更は、あくまで分類が変更されただけで患者が変わったわけではない。一方で分類変更により支払判断に影響を及ぼすため、査定基準の見直しの適否について検討する必要がある。検討にあたっては、世間一般の人々・患者や医師の認識のずれがないかなど、影響を十分に考慮したうえでの対応が必要である」と述べた。また、医療技術の進展に伴い「血管年齢」のような新たな概念が生まれているが、「査定においては直接評価に用いるというよりは、補助的な指標として活用するものである」と解説した。

引受査定での外部データの活用例紹介

「査定評価にかかる時間」についても議論が行われた。1件あたりの査定時間は、査定者の経験や特性、案件の内容により大きく異なる。特に症状告知など内容に曖昧さを含む事案では、詳細な情報収集と慎重な判断が必要となり、時間がかかることが多いとされている。今井氏は、「査定が早くできることがすべてではない。査定者自身の特性を理解したうえで経験を積み、必要に応じて周囲の力を借りながら習熟していくと結果として効率が上がる」と強調した。

本記事を執筆した櫻井氏

また、「疾患名：○○の疑いと記載された場合の評価方法」についても議論した。今井氏は、診断書に「○○の疑い」と記載された場合は、①これから診断するにあたり候補に挙がっている②診断として確定はしていないが一番近い―の2パターンがあることを説明した。いずれのケースにおいても詳細な診断が確定していないため、査定者は不確定性を考慮した評価を行う必要がある。診断が曖昧な案件、例えば悪性と書かれていない場合、軽く評価するのか保守的に評価するのかは、加入商品の保障内容によって変わってくる。顧客の属性、商品性を考慮した判断が必要であると述べた。

「家庭で計測した血圧値の扱い」についても議論が行われた。血圧は患者自身で測定できる検査の一つであり、査定者を悩ませる検査項目の一つである。医療機関での計測値と異なり、家庭での計測値は患者がリラックスした状態で測定されるため、より正確なコントロール状態を反映すると考えられ、臨床において重視する医師も増加傾向にあるなど、家庭血圧値について臨床では受け入れられつつある現状を共有した。一方で家庭血圧値は、測定機器・方法により測定値にずれが生じることも言及した。今井氏は「健康増進の意味合いで血圧を継続的に測定することは重要である。それぞれのメリット・デメリットを総合的に判断し、医療機関・家庭どちらの計測値を採用するかは各社の判断となる」と述べた。

講習会では「アンダーライターのキャリア形成」についても話し合った。若手には基本的なリスク評価の理解と医学知識の習得が求められ、中堅層には専門職として磨きをかけるとともに、査定以外の分野の知識を身に付けるなど、視野を広げる挑戦が推奨された。ベテラン層には、若手への知識やスキルの伝承が重要であり、AI技術の進展による業務の変化にも対応できる柔軟性が求められるとした。

「アンダーライターに求められる適性」について、今井氏は論理的思考力・決断力に加え、医学への持続的な興味関心、査定業務という常に注意を必要とする作業に対する忍耐力が重要であると述べた。アンダーライティング協会のような教育講習会や年次大会などを通じ医学的な知識を常にアップデートし、顧客や営業職員とのコミュニケーション能力を高めることが求められる。今井氏は、「高い集中力と持続力が不可欠であり、自己管理能力や周囲との協力が重要である」と強調した。

最後に、今井氏は日本保険医学会について紹介した。1901年に設立された同学会は、定時総会や研究会を通じて最新の医療事情や業界動向についての情報交換が行われており、非医師の会員も全学会員数の4割を超えている。同氏は、「日本保険医学会は、アンダーライターとしての知識を深める絶好の機会を提供している。日本アンダーライティング協会との連携が重要である」と述べた。

今回の講習会では、AI技術の進展とアンダーライティング業務の未来についての深い議論が行われた。パネラーは「今井氏の豊富な経験と知識に基づく講義は、参加者にとって非常に有益であった。今後も日本アンダーライティング協会は、講習会を通じて業界全体の知識と技術の向上を目指していく」と締めくくった。

（文責：東京海上日動あんしん生命ユニットリーダー　櫻井弘美）